灯

未知へのあこがれ
南極展から

草野　義輔

師走ともなれば寒さも本格化し、当地日田では雪が舞い、氷が張る日も珍しくなくなる。

寒いといえば地球で最も寒いところは南極大陸で、何でもマイナス八九度の記録があるという。

先月ロータリークラブの大会で別府に出かけ、併設の南極展を見る機会があり、数千年前という南極の氷にさわることができた。さしたる科学的知識は持ち合わせていないが、南極と聞くと思い浮かぶ言葉がいくつかある。

まず南極点に人類で初めて到達したアムンゼン。そのアムンゼンとの競争に負け悲劇的最期を遂げたスコット、飛行機で南極点に達したバード、そして日本人として初めて南極探検に向かった白瀬中尉、等が次々と頭に浮かぶ。

小学生のころは宇宙に関することが大好きであったが、南極も宇宙と変わらないはるかな未知の世界であった。

今でも記憶に残っているこれらの知識はすべて五十年前、父が買ってきてくれた「白い大陸南極へ」という本を繰り返し読んだおかげだ。

未知なるものに対するあこがれや疑問、なぜ?どうして?といった思いを抱く感性は若い世代の特権ともいうべきことかと思う。

さすがに還暦が近くなればそのような感性はほとんど失われてしまっているが、南極展などを見ると、そういえば大昔あこがれたものだ、という感慨にふけってしまう。

今日の若い世代はなぜ?どうして?と思う気持ちをもっとしっかり持ってほしい。それぞれの答えを見つけ出すには少々時間はかかる。しかしその時間は明日に希望を持つ貴重な時間であり、生きる力を持つことにきっとつながるのではないか。最近しみじみ思うことである。

（日田市昭和学園高校理事長）